

Back Number

本論文は

世界経済評論 2020年11/12月号

(2020年11月発行)

掲載の記事です



世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

文化と営利

：比較経営文化論

文京学院大学理事長・経営学部教授

島田 昌和



【著者】

安部悦生（あべ えつお）

明治大学教授

【発行】有斐閣，2019年2月

【判型】四六判，486ページ

【定価】本体4000円＋税

日本経済・日本企業が世界のメインステージから離されつつある現状の中で、日本の経営史家は自分自身の研究の拠り所さえ失いかねない事態に陥っている。安部氏の近著『文化と営利』は、そんな暗雲が垂れ込める学会に、対処療法のようなちまちましたことをせず、王道を行けと自らの筆をもって示している野心作である。

人々や組織や社会の「思考・言説・行動のパターン」＝文化と、人々に生きる糧を与えてくれる営利活動や営利組織を取り上げてその関係性、これを筆者は「共進化」と呼んで分析対象としている。基本的認識として人々が共有する文化が資本主義の形を性格づけている。宗教が文化に与える影響から逃げず、取り扱う国はイギリス、アメリカ、中国、イタリア、ドイツ、

日本と幅広い。

経営文化としてメスを入れるのは、階級構成、宗教、企業構造、教育制度、民族、社会思想、社会変革、人の関係性、地域性などであり、それぞれの国の特性に合わせて、取り上げるトピックに強弱がある。氏自身のその国にまつわる個人的な体験が挟み込まれていて、文化というつかみ所の無いテーマに同じ目線からの観察がはめ込まれたような味わいを出している。最後に主に宗教の違いに根ざした文化間の衝突と企業の海外進出（特に工場の進出のような大団体の雇用者を伴うもの）に付随した「営利と文化の共進化」に筆を進めている。

これらの考察で氏が深く観察してきた国がいかに多様であるか、そして深く考察できる力量を持たれていることを改めて思い知らされる。多様な思想と価値に対する考察も西洋と東洋を股に掛けて古典から現代の研究まで議論を進める凄みを見せてくれる。

私が院生だった30年ほど前、経営史学会の部会は実に面白かった。安部悦生氏をはじめとして米倉誠一郎、橘川武郎、橋本寿朗といった脂の乗った論客が発表者の報告を題材に縦横無尽に論戦を繰り広げていた。安部氏の当時の印象はチャンドラリアン（経営史の泰斗アルフレッド・チャンドラーの信奉者）であり、アメリカのビックビジネスの存在を下敷きにしながら外から日本の経営を評するようなスケールの大きさが駆け出しの院生にはキラキラ輝いて見えた。その後、大学経営の激務に忙殺され、氏の次なる大テーマを間近に聞く機会はずっと失われていた。それから解放され、ため込まれたマグマのように一気に目の前に披見された。この書で大きな舞台を用意したよ、この舞台の上に次なる経営史学のワクワクするテーマが転がっているだろう、それを掴むのはもう僕じゃないよ、と言っておられるのか。いや先生とちょっと議論しないと、答えは見いだすことが出来ません。まだまだ我々とお付き合いをお願いします。（しまだ まさかず）